



# 第17回

## 松瀬学

### 申年生まれのベテランが吠える 村田互「今年はオレの年」

ヤマハ発動機

心配、御無用。ワタルは元気だった。

昨年、ワールドカップ(W杯)の代表メンバーから外れはしたが、ラグビーへの情熱は変わらない。在籍するヤマハ発動機のグラウンド(静岡県磐田市)。骨の髄まで凍りそうな日でも、元日本代表S Hは黙々とパスを投げ、タックルし、走り続けていた。

なおも光を放つ。小さな背中には覇気と誇りとちよっぴり哀愁が漂っている。

新春。今月36歳、申年生まれの好漢は笑うのだ。「申年は俺だ、復活のトシだ。新たなムラタワタルを見せたい。」

まだ俺はできる、今でも日本でナンバーワンだぞって。

グラウンド横の体育館でのインタビューだった。いつも通りの律儀な対応。両手を膝に載せ、背筋を伸ばす。ファンから愛されるはずである。で、古い話だけれど、やっぱり、話題はW杯へ。4大会連続出場の夢は成らなかった。「もちろんショックだった」

社会人のトップリーグでは序盤、不本意なプレーが続いた。体調を崩し、怪我也あった。苛立ちが募った。

「はっきりとアナが空いた感じだった。なんか体が重いし、きついし。正直、自分のプレーができていなかった」

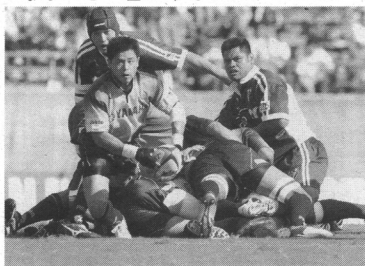
そんな時である。友人であるサツカカーのゴン中山(雅史)が自宅にきて、激励してくれた。「プレーしている以上、やっぱりジャパンを目指すでしょ、って。熱いヤツです。うれしかった」。

W杯中断の再開後、調子が上向いてきた。動きにキレが戻った。そして、

開争心に火がついた。「これ、笑われるかもしれないけど」と、エピソードを打ち明ける。

12月7日のサントリー戦。実はその前日、テレビ中継の解説者がジャパンの向井昭吾監督と知った。

「ほんと、ふっと燃えるものがあつた。まだ、できるというのを見せないといかんと」



サントリー戦のプレーは凄かった。結果は快勝、これ以上昇気流に乗った。

古果の東芝府中戦ではラスト3分まで2トライを挙げ、12点差を追いついた。体を張る

「ステランとして」「つなぐ」ことも意識する(左)

プレーに胸を打たれた。つなぎと突破とタックルと。プレーに凄味が加わり、アシストに「俺はやっぱり、アシストにすく、こだわっている。ベテランの味として、みんなにいい球を供給してやりたい」

ヤマハは過去2季連続で全国ベスト8だった。フィジ

「挑戦」がキーワードである。フランスに渡り、『プロ第1号』にもなった。

「ラグビーの最先端にいて、流れを変えてきたのかな。家族がいたから、チャレンジができたんです」

ラグビーをしてみなかったら、デザイナーを目指していた。初夢にはどんな絵を？

「サルがいっぱい、キース・ヘリングのサル版です。ラグビーボールを持って走っているのが俺です。楽しそうに」

2004年。

「俺のトシ。サイコーの年になる予定です」

引退の二文字も忍び寄ってくるのだから、ま、新年だから無粋なことはいではないか。最後に、ただひたむきにラグビーと家族を愛するトシ男に年賀状を。

「ワタルさん、あなたほど輝いています」。